令和４年度　学校総合評価

６　今年度の重点課題に対する総合評価

「学習活動」「学校生活」「進路支援」「特別活動」の４領域で重点項目・課題を設定して教育活動に取り組んだ。４領域とも昨年度の反省･課題を踏まえるとともに、新型コロナウイルス感染症防止対策を図りながら、授業や部活動、各種行事を行った。「学習活動」では、生徒および教員用タブレットを積極的に活用し、教育用クラウドサービスやタブレットを利用した学習指導の推進を目標とした。「進路支援」では、１・２年生において、進路実現のための基礎学力の重要性を意識させるとともに、学校見学会や校外での研修会などへの積極的な参加を促し、多様な進路希望や大学等入試方法の多様化に対応する取り組みを行った。各重点課題の評価等の概要は以下のとおりである。

(1) 学習活動

コロナ禍において多様な制約がある中、多くの教員がＩＣＴを効果的に活用し、「主体的・対話的で深い学び」に向けて授業を工夫し、実践した。また、研究授業や互見授業により、教科部会を中心に授業の成果や課題を共有し、授業改善に努めた。生徒の家庭でのＩＣＴの利用状況については、週２回以上利用している生徒が６割に達しており、多くの生徒がタブレット等のＩＣＴを有効に活用している。活用の効果については、今後も継続して検証していく必要がある。

商業科では、多くの生徒が自らの目標を持ち、主体的・意欲的に検定取得に取り組んでいる。検定に合格するためには商業科目の基礎をしっかり身につけた上で、自らの力を向上させていく必要があるなど、検定取得は学ぶ意欲や進路目標の達成にもつながっている。授業では、常に効果的な指導を模索し、改善を行っている。

(2) 学校生活

スマートフォンの普及に伴い、使用ルールやマナーを守らない生徒や依存症の生徒も見受けられる。スマートフォンの長時間使用を控え、ネット依存にならない方策を生徒自治委員会が中心となって活動した。学校ネットルール４箇条を守るほか、統一ＨＲで「NO スマホ時間を増やすためにどうすればよいか」について話し合い、その危険性や自分たちの行動について考えさせ、規範意識を高めていくよう働きかけた。

生活習慣を整え、心身の健康について主体的に判断する態度の育成を図るため、生徒保健委員会で調査・研究を行い、広報活動も行った。

(3) 進路支援

１・２年生に対しては、自らの進路目標を実現するため、進路支援プログラムの事前・事後学習を充実させ、進路実現のために基礎学力の大切さを認識させるとともに、オープンキャンパスや学校見学会、校外での研修会などへの積極的な参加を促した。

３年生に対しては、教員が積極的に進路の情報収集と情報共有を行い、学習指導や進路指導に取り組んだ結果、進路支援の満足度に対して全体として「ほぼ達成」できた。

(4) 特別活動

感染防止対策を講じながら学校行事や特別活動を検討・実施した。各活動に全校生徒が意欲的に取り組み、集団活動や体験活動を通して、豊かな学校生活を築きながら連帯意識を育むことができた。体育大会では、生徒会が中心となり種目や実施方法を工夫したことで、学年を越えて様々な場面で生徒の自主的な活動を見ることができた。文化部発表会では、実施方法を工夫し、合唱コンクールも３年ぶりに開催した。

部活動では、女子ホッケー部が国民体育大会、全国選抜大会で準優勝、新聞部が全国高総文祭に７年連続で出場するなど、多くの部が成果をあげた。また、各部が実態に応じた目標を設定し、運動部、文化部ともに効率的な活動を実践することができた。

７　次年度へ向けての課題と方策

(1) 生徒の学びを保障するため、各教科でＩＣＴを活用した授業改善や教育用クラウドサービスを利用して、「主体的・対話的で深い学び」を推進する授業づくりをさらに進めていくとともに、生徒のタブレット使用のモラルを高めていく必要がある。商業科については、今後も粘り強く指導を行い、上級の資格取得に向かってチャレンジしようとする意欲を持たせる。

(2) ＳＮＳの利用に関しては、身近な事例を提示し、生活習慣の改善や自己管理について注意喚起および広報活動をするとともに、生徒自らが考え注意し合うことで生徒主体の活動を増やし、規範意識をさらに高めていく。

(3) 多様な進路希望や大学等入試方法の多様化に対応するため、進路意識を醸成する行事や情報提供に努めるとともに、よりよい情報・学習環境の提供など進路目標の達成に生かせるような取り組みを継続していく。

(4) 学校行事の実施方法について改めて検討を行い、生徒がより主体的に関わる活動を行っていく。部活動においては、現状を明確に分析し、体力・技術・精神面の充実を図る方法を検討し、取り組んでいく。

8　学校アクションプラン

令和４年度　石動高等学校アクションプラン　－１－		
重点項目	学習活動（生徒の学習意欲の喚起と基礎学力の伸長及びＩＣＴ活用）	
重点課題	①②日常の授業において、新型コロナウイルス感染症を予防しつつ「主体的・対話的で深い学び」を実践するため、さらには家庭における学習や探究を促進するために、ＩＣＴ機器等を積極的に利用し、生徒の学びに向かう意欲を喚起する ③検定合格に向けて主体的に学習に取り組む能力を育成する	
現　状	①②昨年度後半から進めているタブレットと教育用クラウドサービスの活用により、すべての生徒・教員がこれらを使いながら授業を行える環境が整った。しかし、家庭での活用は不十分であり、不適切に使用している生徒も少なからず存在する。そこで、教員にはアクティブ・ラーニングを取り入れた授業改善やその際の教育クラウドサービスの活用実践を進めること、生徒には自分の家庭学習の実態を自覚させ、積極的に学習や探究活動に取り組ませることの方策を講じていきたい。 ③商業科の生徒はそれぞれの目標を持って、主体的・意欲的に検定取得に取り組んでいる。検定に合格するためには、高校に入ってから学ぶ商業科目の基礎をしっかりと身に付けた上で、それぞれの検定に合わせて自らの力を向上させていく必要がある。授業においても、生徒の学力を伸ばし、検定取得につながるように、常に効果的な指導を模索し工夫していくことが求められる。検定取得が生徒の学ぶ意欲や進路目標の達成にも繋がっている。	
達成目標	①「主体的・対話的で深い学び」の授業に取り組んだ教員の割合 ②家庭学習でタブレット及び教育用クラウドサービスを利用した回数	③商業科：卒業までに全商主催検定９種目中、３種目以上で１級を取得した生徒数 (1) 簿記　(2) ビジネス文書 (3) ビジネス情報　(4) ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾐﾝｸﾞ (5) 商業経済　(6) 珠算　(7) 電卓 (8) 英語　(9) 会計実務
	①１００％　②週あたり３回以上	１０人以上（卒業年度）
方　策	・互見授業を行い、アクティブ・ラーニング(AL)の実践やタブレット等を用いた授業の積極的な実施と意見交換を促す。 ・生徒に効率よく家庭学習を行うアイテムとしてタブレットや教育用クラウドサービスの積極的な利用を促す。	・朝や放課後の補習授業を実施する。 ・商業関連部活動を充実させる。 ・３年生の１級未取得者に対して特別指導を実施する。 ・教員の指導力向上のための校内研修会を充実させるとともに、校外で開催されるセミナー等へ積極的に参加するよう努める。
達成度	①「主体的・対話的で深い学び」の授業に取り組んだ教員の割合　２９名／３６名（約81％） ②家庭学習でタブレット及び教育用クラウドサービスを利用した回数 週あたり３回以上使用した生徒の割合　38％	③全商主催検定１級３種目以上合格者 ２１名（昨年同時期６名） ５種目３名、４種目５名、３種目１３名 ※過去最高合格者数２３名（平成23・24年度）
具体的な取組状況	新型コロナの影響により、対話を伴う授業の自粛を余儀なくされた昨年度から、改めてＡＬの実践を呼びかけたことでコロナ禍前の実施状況に近づいた。 生徒の家庭でのＩＣＴの利用状況も週２回以上利用している生徒が全体の６割に達していることから、またまだ改善する余地は残っているものの、ＩＣＴ利用の日常化に近づきつつある。	商業科の教員全員が連絡を密にし、個々の生徒の弱点が克服できるように検定取得に向けて、各授業で模擬問題や過去問題に取り組むことに加えて、放課後の補習、答案練習会、質問教室を実施した。
評　価	①　C　　②　C	③　A
学校関係者の意見	コロナ禍において多くの制約がある中、様々な工夫をしながら授業を行ったと思う。その成果について教員間で共有し、今後も授業研究を推進してもらいたい。	今年度は１級５種目合格者が３名、４種目合格者が５名いた。今後も、多くの生徒の検定合格に向けてきめ細かな指導をお願いしたい。
次年度へ向けての課　題	来年度は、対話を重視する授業がより可能になることから、ＩＣＴの有効的な利用のさらなる工夫を進め、家庭においても、生徒がより積極的・主体的に学習に取り組む環境づくりに努めたい。	現２年生は現在３種目合格０名(昨年２名)・２種目合格１５名(昨年２０名)であり、３種目以上合格に向けて計画を立て取り組ませたい。

（評価基準　Ａ：達成した　Ｂ：ほぼ達成した　Ｃ：現状維持　Ｄ：現状より悪くなった）

令和４年度　石動高等学校アクションプラン　－ ２ －	
重点項目	学校生活（心身ともに健全な人格の育成）
重点課題	規範意識の向上と規律正しい学校生活の確立
現　　状	・スマートフォンの普及に伴い、使用ルールやマナーを守らない生徒やネット依存症の生徒も見られる。 ・ネットパトロールからの情報提供を受けて指導した生徒は、平成３０年度は１０名、令和元年度は９名と急増したが令和２年度は３名、令和３年度は１名と減少した。 ・携帯電話やパソコンに関するアンケート結果より、平日３時間以上使用している生徒は、令和２年度は３８．７％、令和３年度は３３．２％で、長時間使用が生活のリズムを崩し、家庭学習時間や睡眠時間の確保の妨げになっている。また、ネット依存チェックの調査結果では、全校生徒の４８％は生活に何らかの悪影響が出ている状況、４人の生徒は重大な問題があると診断評価されている。 ・生徒が自ら「学校ネットルール４箇条」を決定し、学校ネット実行委員会からも遵守を働きかけているが、３箇条以上遵守している生徒は８７．２％、４箇条遵守している生徒は２４．４％と低い。特に「Ｎｏスマホ時間（帰宅後２時間以上）を作ろう」というルールが遵守できない生徒が多い。ネット利用に関する自己管理ができない生徒や規範意識の低い生徒が多いのが現状である。 ・不規則な生活習慣により不調を訴える生徒がいるため、基本的生活習慣を確立できるように心身の健康について主体的に考え、判断し、行動する態度の育成が必要である。
達成目標	①学校ネットルール４箇条を遵守できる者の割合　　８０％以上
	②生活習慣にかかわる広報活動　　各学期に１回以上行う
方　　策	・携帯電話やパソコンに関するアンケート、ネット依存チェックで実態を把握し、イレブンセブン運動やネットルール４箇条の遵守を積極的に推進することで長時間の使用を控えさせ、ネット依存にならないよう指導を行う。 ・情報モラルやセキュリティの意識向上を図るために授業以外にも学習する機会を増やすとともに、教職員が携帯電話に関する知識を深める機会を設けて、生徒への指導を充実させる。 ・家庭でスマートフォンの使用について話し合う機会を持つなど、ＰＴＡ総会や各学期の保護者会等で保護者に協力を要請する。 ・クラスごとにルールや達成目標を決めるなど、生徒が問題意識をもって主体的に活動できるよう環境を整える。 ・生徒保健委員会で生活習慣について知りたいことを話し合い、調査・研究を行う。
達 成 度	①学校ネットルール４箇条を遵守できる者の割合　　54.5％
	②保健だより等の情報紙の発行回数　　５回（１学期２回、２学期１回、３学期２回）
具体的な取組状況	①　生徒自治委員会がネットルール４箇条意識アンケート調査（全校生徒対象）の実施や統一ＨＲにおいてスマートフォンによる「認知機能の低下」・「脳過労」の危険性について説明し、どうしたら「NOスマホ時間」を増やすことができるかについて話し合うことにより、当事者意識を持たせ、日常生活でのネットルールやスマートフォンへの関わり方について考える良い機会となった。その結果、「NOスマホ時間２時間以上」のルール遵守の目標は達成できなかったが、遵守できた生徒の割合が昨年度に比べ倍増しており、今後に期待したい。
	②「保健だより」を通して、感染症予防、熱中症予防、ストレス解消法や性に関することなど、時期に合わせて心身の健康に関する情報を発信して、生徒の自己啓発を促した。また、生徒保健員会では、「熱中症予防」を取り上げ、調査・研究を行い、展示発表により全校生徒に発信するとともに、学校保健委員会での発表を通じて専門家から様々な助言を得ることができた。
評　　価	①　C
	②　A
学校関係者の意見	スマートフォンの利用の仕方については、学校でのルール作りだけではなく、保護者や地域の人たちの協力も不可欠である。また、スマートフォンを用いた最新の事件や事故などについて考えたり、議論することでネット利用について深く考える機会になるのではないか。 「保健だより」の定期的な発行はよい取組である。感染症予防やストレス解消法など「保健だより」の内容に関して、友人や家庭でも話し合う機会が持てればさらによいと思う。
次年度に向けての課　　題	①・スマートフォンの長時間使用が生活習慣（睡眠や健康面）に及ぼす影響についても、広報活動を各学期に実施し、能動的に思考する環境を整える。 ・クラスごとにルールや達成目標を決め、生徒自ら考え注意し合うことにより、自己管理できる環境を作る。 ・ＳＮＳの利用について、身近で起こっている事例を提示してネットの危険性や正しい使用方法を指導し、規範意識を高める。
	②・生活習慣に関わる広報活動を継続して行い、心身の健康について啓発し、生徒自身が毎日の生活習慣を整え、自分で健康管理を行おうとする意識づけを図る。

（評価基準　Ａ：達成した　Ｂ：ほぼ達成した　Ｃ：現状維持　Ｄ：現状より悪くなった）

令和４年度　石動高等学校アクションプラン　－ ３ －	
重点項目	進路支援（自己実現に向けて生徒自らが努力するための支援の充実）
重点課題	進路意識の向上と生徒への情報提供や面談の充実
現　　状	・個々の生徒の進路選択とその実現のために本校独自の様々な進路支援プログラムを行い、オープンキャンパスや見学会などへの参加を呼びかけている。しかし、コロナ禍においてオープンキャンパスが軒並み中止になったりする中で、自らの興味・関心に合わせて実際にオープンキャンパスや説明会に参加する動きが少なくなっている。 ・早期に具体的な進路目標を決められない生徒がおり、進路実現に向けた学習への取りかかりが遅い生徒もいる。
達成目標	①１・２年生：オープンキャンパスや学校見学会、校外の研修会などへの参加回数（WEB 実施を含む）　年１回以上
	②３年生：進路支援の満足度　４段階評価による３以上が９０％以上
方　　策	・進路支援プログラムの内容や実施方法を充実させ、進路意識の高揚を図る。 ・オープンキャンパスや学校見学会の情報を生徒にわかりやすく提供し、休業中の課題にするなどして参加を促す。 ・面談等を通して生徒の興味関心や学習状況を把握し、学校見学会参加の呼びかけや学習に対するアドバイスなどを行う。 ・教員が積極的に進路に関する情報収集と情報共有を行い、個別指導と全体指導をうまく組み合わせながら、学習指導や進路指導を効果的に行う。
達 成 度	①１・２年生：オープンキャンパス等への参加回数（WEB 実施を含む） １・２学年合計　0.97 回/年 （１学年　0.71 回/年、２学年　1.23 回/年）
	②３年生：進路支援の満足度 評価３以上　進路実現のサポート　98.5％　学力を伸ばす努力　98.5％ 面談・個別指導の実施　97.4％　進路情報の提供　96.7％ 学習しやすい環境　95.3％ ５項目すべての項目で、評価３以上が 90％以上
具体的な取組状況	①コロナ禍において昨年度までは中止されていた対面形式のオープンキャンパスが、今年度はほぼ復活した。そのことを周知するため、オープンキャンパスポスターの掲示やホームルームでの参加の呼びかけ、学年ごとに参加レポートを長期休暇の課題にするなどの働きかけを行った。アンケートによると、WEB でオープンキャンパスに参加した生徒も２学年合わせて 30 名以上おり、コロナ禍をきかっけに登場した WEB 形式のオープンキャンパスではあるが、時間や移動の制約を軽減する手段としてうまく利用しているようである。また、最近の特徴として、保護者も積極的にオープンキャンパスに参加されており、１年生では 27 名、２年生では 21 名の生徒が保護者と一緒にオープンキャンパスに参加したと答えている。
	②学校推薦型選抜や総合型選抜が年々増加する中で、生徒一人ひとりとの面談や個別指導が大変重要になってきている。指導は担任や学年担当者が中心ではあるが、生徒それぞれの進路実現を大切にするために、学校全体で協力体制を整え生徒の個別指導にあたっている。出願のための志望理由書の作成などの際にも、個別指導を通して本人の考えを深めたり、新たな視点を与えたりするなどの細かな指導を行っており、生徒の大きな成長の機会となっている。また、本校の生徒は、普段は自分から質問することができないところがあるが、個別での指導であればわからないことを遠慮なく質問することができ、生徒が自らの弱点を把握するのに役立っている。
評　　価	①　B
	②　A
学校関係者の意見	生徒の進路希望先の多様化や大学等入試方法の多様化等、課題はあるが、今後も今年度同様に個別指導の充実を図ってもらいたい。 早期に自分の進路目標を明確にするためにも、１年次からのオープンキャンパスへの参加を促す取組は効果も大きいと思う。
次年度に向けての課　題	今年度オープンキャンパスに参加していない生徒も、「これから参加してみたい」と答えた生徒が８割近くを占めていた。引き続き、進路選択のヒントになるような研修会や、オープンキャンパスの情報提供を継続して行っていきたい。機会があれば体験会や見学会に参加してみたいという意欲的な生徒も増えてきており、面談・ホームルームを利用し、情報が広く届くような体制を整えていきたい。 本校の進路支援に関しては、選抜方法多様化の動きを受け、推薦型選抜や総合型選抜を利用する生徒の指導を丁寧に行いながらも、一方で、一般選抜で受験する生徒に対して精神面も含めサポートし、バランスよく２つの指導を両立させていくことが非常に大切になっている。このバランスに配慮しながら、教員が生徒一人ひとりの進路を大切にすることで、すべての生徒が自分の進路実現を十分サポートしてもらえたという気持ちが持てるよう努めていきたい。

（評価基準　A：達成した　B：ほぼ達成した　C：現状維持　D：現状より悪くなった）

令和４年度　石動高等学校アクションプラン　－　４　－	
重点項目	特別活動（学校行事を通して自主的な態度の育成）
重点課題	特別活動に対する主体的参加
現　　状	・学校行事である体育大会や球技大会では、生徒達は意欲的に取り組む姿が見られ、これらの集団活動や体験的な活動を通して、豊かな学校生活を築きながら自主性や連帯意識を育んでいる。 ・本校部活動数は運動部１３、文化部１０あり、部活動加入率は運動部約６３％、文化部約２９％、全体で約９２％と、多くの生徒が部活動に参加している。
達成目標	①学校行事（体育大会、球技大会）に対する充実度　　５段階評価による４以上が７０％以上
	②部活動に対しての充実度や結果に対する満足度　　５段階評価による４以上が７０％以上
方　　策	・生徒会活動を充実させ、代議員会等を適宜開催するなどして、生徒の視点から参画させることでより多くの生徒が主体的に関わることができる活動の機会を設ける。 ・部活動登録後、全体計画や活動内容等について顧問と部員との話し合いを行いながら、個人や集団の実態に応じた目標を持たせ、活動を行う。 ・学校行事や高体連、高文連主催の各種大会等後にアンケートを実施し、その結果を踏まえ、今後の活動に検討・改善を行う。
達 成 度	①体育大会についてのアンケート結果 ５段階評価による４以上　総合評価（93.1%） 球技大会についてのアンケート結果 ５段階評価による４以上　総合評価（90.2%）
	②部活動についてのアンケート結果（１・２年生、３年生の順） 運動部　評価４以上　活動計画や活動内容（78.5%、72.4%） 活動時間や休日（71.7%、71.4%） 各種大会または各種発表会（33.5%、33.7%） 文化部　評価４以上　活動計画や活動内容（71.9%、90.6%） 活動時間や休日（74.2%、84.9%） 各種大会または各種発表会（41.6%、58.5%）
具体的な取組状況	①学校行事 体育大会は昨年同様、新型コロナ感染防止対策の徹底のため、コロナ禍以前と比べ種目数の削減、種目内容の変更などを生徒会執行部が中心になって検討した上で、予定通り６月に実施することができた。閉会式ではこの３年間一度も歌うことができなかった校歌を全校生徒で斉唱することができた。球技大会は３年ぶりに実施した。新型コロナ感染防止対策として、同一会場にひとつの学年の生徒だけとし、学年間の接触を避ける対策を講じた。この結果、自分達の学年の試合を全て観戦し、応援することができた。
	②部活動 ホッケー部については国民体育大会、全国選抜大会で、女子が準優勝を果たした。野球部は春季大会、秋季大会でベスト８に進出した。陸上競技部の女子部員が北信越選抜大会に出場した。新聞部は全国高総文祭に７年連続で出場した。吹奏楽部は富山県吹奏楽コンクール、中部日本コンクール県大会にて銀賞を受賞した。珠算経理部は県大会で３位に入賞し、全国商業高等学校ビジネス計算競技北信越大会に出場した。書道部は全国書道展にて特賞をはじめ多数の入選を果たした。
評　　価	①　A
	②　B
学校関係者の意見	体育大会や球技大会が楽しかったと感じた生徒が９０％以上いたことは素晴らしいことである。コロナ禍で実施自体も大変であったと思うが、教員と生徒が協力し、競技種目や運営方法を工夫したことでより満足度が高まったのではないか。 ホッケー部の活躍や新聞部の「学窓新聞」、ボランティア活動など、多くの生徒が活躍している。もっと外部に紹介する機会があればよいのではないか。
次年度に向けての課　　題	体育大会や球技大会など、コロナ禍以前に実施していた学校行事を今年度は全て実施することができた。次年度も感染防止対策を講じながら種目内容や種目数などの改善を加えるなど、学校行事や特別活動を検討・実施していきたい。 部活動に関しては、今後も生徒一人ひとりに感染防止対策への意識を高めさせ、感染予防の取り組みをさらに強化させていくとともに、この環境下の中においても体力・技術の向上、精神面の充実を図る練習方法などを顧問と部員が知恵を絞り、取り組むことが必要である。

（評価基準　A：達成した　B：ほぼ達成した　C：現状維持　D：現状より悪くなった）